

新潟大学理学部同窓会

会報

第18号 2017.08.06

春の理学部



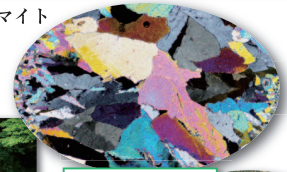
サイエンスミュージアム開催状況



地質巡検の様子



キャップドロマイト



顕微鏡写真



コノドント



あのころを想い、いまを想う

理学部同窓会会長 野本 憲雄

本棚を見ていたら、阿部次郎の「三太郎の日記」が出てきた。随分古い本だ。60年近く前、大学入学直後に買ったのは覚えている。あの頃を懐かしく思い出した。部屋をお借りしていた学校町のお宅には学生が5、6人いた。毎朝早く起きてロンジ（注：西大畑時代にあった学生食堂）で朝食を食べた。いつもご飯と味噌汁に漬物だった。夕飯でもそれに瘦せたメギスが2匹つくくらいだった。ときはまだ「米穀通帳」が必要な時代で、食費は確か1日3食で85円だったから無理もないことだったと思う。そのうちだんだんずぼらになって寝坊して食い損なうことが多くなったが、後はどうしたか忘れてしまった。

ある夜上級生の部屋でだべっていると、「大学生になったらこのくらいは読まないで駄目だ」と言われて買ったのを覚えている。他にも「大学生の必読書」と言われて、西田幾多郎の「善の研究」や倉田百三の「愛と認識との出発」なども買って、なんか大人になったような気がした。高校生まで読書なんか全くしたことがなく、宿題の読書感想文はどうしていたのだろうと思うくらいだったから、買ってはみたものの、読み始めるとすぐに寝てしまう体たらくで、睡眠薬にはなっても教養にはならなかった。もっとも勤めた先輩も本当に読んでいたかどうかは定かではない。

阿部次郎がどんな人か調べてみた。私が高校を卒業した頃亡くなった、反自然主義の文芸評論を発表し、大正教養主義の一人として個人主義的理想主義を説いた方で、漱石に師事し、東北大教授だったと出ていた。

前々から漱石の重要・貴重な資料がなぜ東北大の図書館に多いのかと気になっていたが、「漱石全集」の編集に尽力した小宮豊隆も東北大学教授であったことと合わせて、そうかと合点がいった。また、西田幾多郎が書簡の中で、「将来の世界というのは今日の一派の人々の考える如く各国孤立の国家主義に落ち着くのではなく、何らかの意味において世界的協調ができなければ落ち着かないのでしょうか。今日の各国の悩みは本当はそこにあるのではないかとおもいます」と書いていることも知った。「アメリカ・ファースト」、「EU離脱」に揺れる今日の世界を言っているように思った。人間の考えは堂々巡りしているのかなとも思った。

今年度、理学部は学科がなくなり「1学科制」になり、定員も増えた。関係者のご苦労は大変だと思います。18世紀のフランス重農主義経済学者ケネーは、「農業を盛んにするためには、農民をゆたかにし、希望を持たせなければならない」と初めて述べたそうである。今の学生さんにいわゆる「必読書」があるかどうかは知らないが、理学部も制度がどのように変わろうとも「教育研究を盛んにするためには、学生さんを（生活も教養も）ゆたかにし、希望をもたせなければならない」と思います。同窓会もこのために些かなりとも協力し、力になれたらいいなあと考えています。





ご挨拶

理学部長 前野 貢

平成29年4月より理学部長を拝命しました前野 貢です。この数年間で大学を取り巻く環境は大きく変容し、新潟大学は創生学部の新設置、理工農3学部の同時改組が行われました。改組後の新しい理学部において最初の理学部長を仰せつかったことは大変光栄ではありますが、同時に大きな責任を背負ったという自覚があります。新しい理学部に入学した新入生たちが卒業する4年後に、一人でも多く、入学してよかったと思ってくれるように、精一杯の努力をする所存ですので、なにとぞ、よろしく願いいたします。また理学部同窓会の会員の皆様には、これまでと同様、理学部の状況をご理解いただくように努めますので、今後とも暖かいご支援をお願いいたします。

●新しい理学部教育の概要

新潟大学理学部は、平成29年度4月より、学生定員を10名増員し、1学科(理学科)7主専攻プログラム(数学プログラム、物理学プログラム、化学プログラム、生物学プログラム、地質科学プログラム、自然環境科学プログラム、フィールド人材育成プログラム)で新たなスタートを切りました。本年度は216名を新入生として迎え入れ、学生は志望分野にかかわらず6つのクラスに配属されました。各クラスには6名の教員がクラス相談員として付き、学生の履修指導、進路指導を行います。4月の入学時には各クラスでガイダンス、懇談会などが開かれ、クラス内での交流行事が行われました。理学科の1年生は、まず理学共通ベーシック科目

を中心に学びます。第1タームの「理学スタディ・スキルズ」では大学生としての共通の学修方法に加え、理学部の主専攻プログラムの選択方法を学びます。第2タームの「アクティブ・ラーニング」では、体験を通して、各専門分野の研究に関わる課題や企業戦略、科学技術に関わる課題に自主的に取り組む方法を学びます。並行して、外国語、自然系専門基礎科目、自然系科目、人文系科目などを履修していきます。第3ターム、第4タームになると、理学部共通コア科目(基礎的な専門科目)の履修がスタートするとともに、理学部共通の実習・演習科目が本格的に始まります。これらの初年度カリキュラムを通して、学生は自分に合った主専攻プログラムをじっくりと考えることができます。このように新カリキュラムは、学生の幅広い視野を入学後も保ち続けるための工夫が成されています。

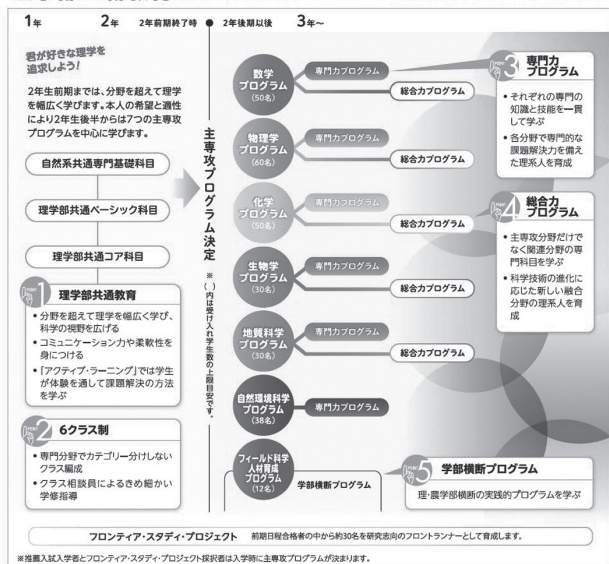
理学部に入学する学生のなかには、自分のやりたい専門の分野を受験のときから決めており、将来専門分野における研究経験を生かした仕事につきたいと考える学生も含まれています。そのような学生の希望をかなえる制度として、「フロンティア・スタディ・プロジェクト」を導入しました。前期日程入試の志願者のうち30名ほどを「研究志向のフロントランナー」として、入学時に選択する主専攻プログラムを決定し、1年生のときから専門分野の教員がアドバイスしていきます。例えば、上級生に混じって専門分野の研究活動に参加したり、自主的にゼミを作って専門分野の勉強をしたりすることをサポートします。2年生になると専門科目の先取り履修も可能となります。このように、早くから専門的な勉強に取り掛かりたい学生も支援していきます。

これまで理学といえば、基礎的な学問を極めるというイメージがありますが、新しい理学部では、実践的な課題に対応していける人材育成を目指す主専攻プログラム「フィールド科学人材育成プログラム」を、農学部と協働で開設しました。このプログラムでは、生態・環境の保全、災害対策などの諸課題に対し、フィールドに即して多角的視点から総合的に理解・解決できる実践力を備えた人材を育成します。大自然に恵まれた新潟県の特徴を利用し、地方に根付いた研究教育を行ってきた理学部附属臨海実験所、農学部附属フィールド科学教育研究センター、朱鷺・自然再生学研究センター、災害・復興科学研究所などが協力し、より一層魅力的な教育・研究の場を提供してくれます。

2年生の第2学期から各学生は主専攻プログラムを選択しますが、その時に、専門分野を体系的に習得し

理学部の新教育カリキュラム

分野を横断する新しい理学教育を実現



今と未来

て課題解決力を育成する「専門力プログラム」、ひとつの専門分野に加えて関連分野の知識・技能も習得し、多様な課題に対する課題解決力を育成する「総合力プログラム」のいずれかを選択して専門科目の履修を始めます。このように新カリキュラムは、学生の多様なキャリアパスの方向性に対応できる柔軟なしくみを取り入れてあります。

●ご支援のお願い

新教育カリキュラムでは、特定の分野で体系的な専門性を持つ人材に加え、分野横断型の専門性を身につ

けた人材、実践課題に総合的に対応できる人材を育てます。このように多様な人材育成を可能にするのが、新しい理学部です。とはいえ、教員だけで理学部の教育が成り立っているわけではありません。地元の企業様からのご支援、保護者様からのご支援、そして同窓会の皆様からの暖かいご支援がいろんな面で学生の教育を支えています。何卒、新しい理学部の活躍を見守っていただければと願っております。本年度より理学部のホームページをリニューアルしましたので、入試情報、教育活動、研究活動などの詳細を改めてご覧いただければ幸いです。

学科だより

数学科

「大切な時間」

プログラム長 三浦 毅

皆様既にご存知かも知れませんが、これまで「理学部数学科」として築いてきた歴史に終止符が打たれることとなりました。正確に申し上げますと、この4月より入学してきた新生は「理学部」の学生であり、入学から1年半程の間は理学の様々な分野を学び、2年生の第二学期よりそれぞれの希望する専門分野へと進んでゆくこととなりました。現在はこれまでの理学部数学科の学生と新理学部の学生が同じキャンパスで過ごしている状態です。理学部一学科として新生を迎えることが出来ましたので、新理学部生に対して期待する気持ちと、数学科としての学生が入学してこなかったことに対する寂しさが入り交じった気持ちで今年度のスタートを切りました。

「理学部改組」や「理学部一学科」という言葉によりやく慣れてきた所ですが、実際には先にも申しました通り、新旧二制度が同時進行している状態ですので、すべてがこれまで通りとは言えず、私自身も混乱することが少なくありません。それでも新理学部に入学してきた新生に、これまで以上の良いプログラムを提供出来るように準備・計画をし、実際に授業等を行っている所です。これまで数学科の学生が学んでいた科目はどれも基本的なものばかりですので、制度が変わっても学ぶべき内容が大きく変わる訳ではありません。2年生第2学期に数学に進む学生が、それらの専門科目をスムーズに学べるようにするため、科目の学修時期や内容を検討し直し、これまでよりも基礎科目数と学修時間を増やす等の工夫がなされています。数学科には中学・高校の教員を目指す学生が少なからずおりましたので、数学プログラムになってもそのような学生の支援体制を維持しながらも、さらに応用数学科目にも力を入れ、数学そのものを学ぶだけでなく、学んだ数学を実社会に活かす内容も強化しています。

数学科卒業生の半数程度は、一般企業に就職し活躍しています。このことは案外知られていないようで「数学なんて学んでも就職出来ないから止めた方がいい」という話を聞くことがあります大変残念に思います。学部卒業後により深く数学を学びたいと考える学生は大学院に進学することが可能ですし、就職を希望する学生は様々な職種に就き活躍しています。数学プログラムの卒業生はまだこれから先の話ですが、先輩方の歴史と伝統を引き継ぎ、これまで以上に活躍してくれることを期待しながら日々接しています。

物理学科

物理学プログラム(物理学科)のこの一年

プログラム長 大原 謙一

最初に悲しいお知らせがあります。物理学科(現物理プログラム)の山田裕教授が平成29年1月21日に、入院先の新潟大学病院にて逝去されました。享年57歳でした。山田先生は、富山県出身で、名古屋大学大学院で工学博士の学位を取得され、名古屋大学工学部助手、島根大学総合理工学部助教授などを経て、平成15年2月に新潟大学理学部教授に着任されました。新潟大学では、高温超伝導体と高圧力下の物性を主な研究テーマとして研究室を構築され、多数の学部生、大学院生の研究指導をされて来ました。また、平成26年には理学部長を務め、改組直前の理学部の総まとめを行い、今般平成29年度に実現した新しい理学部への道筋を示されました。多くの意味で新潟大学を取り巻く環境が大変厳しい状況で、山田先生を失ったことは、我々にとって大きな痛手であり、ご冥福をお祈りいたします。

この1年間の異動としては、原子核理論分野の吉田賢市助教が京都大学に転出されました。

理学部主催の大きなイベントとして、平成29年4月29日に、一昨年ノーベル賞を受賞された東京大学宇宙線研究所所長の梶田隆章教授をお招きして、高校生の

ためのシンポジウム「ニュートリノの不思議な世界」が開催されました。このシンポジウムでは、物理プログラムの教員や大学院生が多く役割を果たし、梶田先生のニュートリノに関する講演のあとで、大原が、現在梶田先生の主要な研究テーマのひとつとなっている重力波に関する講演も行いました。また、シンポジウムの最後に質問コーナーを設定しましたが、多くの高校生の皆さまから質問を受け、梶田先生からは「講演内容に即したい質問が多数あり、新潟の高校生諸君はたいへん優秀ですね」という言葉をいただきました。毎年恒例のケルビン祭は6月6日に開催しました。当日、物理学卒業生の中山高様からの寄付を基にした「中山賞」と同窓会からの支援によりもうけられた「物理学同窓会賞」が、本年もそれぞれ3名の成績優秀な4年生に授与されました。特に今年は、同窓会物理学支部長の越沢祐一様にもお越しいただき、同窓会の活動についての紹介を含めて、学生諸君に一言いただく機会を得ることができました。

今年度は、理学部の改組と授業のクォータ制導入が重なり、学生教育に関しては、試行錯誤の中での船出となりました。さらに、最近の本学執行部の方針により、物理学プログラムでも転出等により空きとなったポストの補充ができず、ますます教育、研究、運営面で多忙を極めていますが、特に専門プログラムをこれから決めていく新入生を中心に、物理学の面白さと考え学ぶ喜びを伝える教育に、また、それと同時にそれぞれの分野で最先端の研究推進に、教職員一同奮闘しています。

化 学 科

化学プログラム

プログラム長 俣野 善博

平成29年度化学プログラム長として、化学プログラム・化学科の近況報告をさせていただきます。昨年度(平成28年度)、化学科は、学部卒業生36名、大学院博士前期課程修了生14名、博士後期課程修了生2名(うち、社会人修了生1名)を送り出しました。学部卒業生のうち、14名が大学院に進学し、21名が民間企業、高校、官庁などに就職しました。また、修士取得者のうち10名が民間企業などに就職し、3名が博士後期課程に進学しました。本年3月末日をもちまして、工藤久昭教授が定年退職されました。工藤先生は、昭和50年3月に新潟大学理学部化学科をご卒業になり、昭和58年12月に新潟大学理学部に助手として着任されました。その後、約33年間にわたり、数多くの学部生・大学院生を指導されました。工藤先生は、超重元素に関する研究、新元素の探索などに長年取り組んでこられました。本年1月に、113番元素ニホニウムの発見と命名に関する業績で、理化学研究所の森田先生をはじめとする研究グループの方々と共に朝日賞を受賞されました。また、最近数年間は、理学部長、自然科学研究科長として我々教職員を牽引して下さいました。この紙面をお借りして、工藤先生に厚く御礼申し上げます。

さて、ご存じの方もいらっしゃると思いますが、今年度、理学部は改組により一学科となり、化学科は化学プログラムという名称で新入生を迎えることになりました。新入生のうち、推薦入試で化学プログラムを選択した学生およびフロンティア・スタディ・プロジェクト(改組に伴う新制度)で化学プログラムを希望した学生は、合わせて11名います。本年4月には、恒例の新入生?教員懇談会や縦コンが開催され、3年次編入生を含む新人達を在学生や教職員が歓迎しました。一方、2年生と3年生は、従来どおり化学科の学生として専門科目の勉強に励んでいます。今年度、化学プログラムの教職員は17名(教授7名、准教授6名、助教2名、職員2名;兼任教員を含む)となりましたが、工藤先生のご退職で生じた大きな穴を埋めるべく、全員一丸となって、学部および大学院の教育に取り組んでいます。また、基礎化学分野のより一層の発展をめざして、研究室に在籍する4年生・大学院生と一緒に質の高い研究を推進し、その成果を社会に発信していく所存です。同窓会の皆様には、今後とも変わらぬご指導ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

生 物 学 科

生物学プログラム

プログラム長 西川 周一

本年3月には4年生21名が生物学科を卒業しました。このうちの10名が新潟大学の大学院へと進学しています。そして4月から生物学科は生物学プログラムと名前を変えました。今年度の新入生はまず理学部共通教育を受けることになります。彼らが生物学プログラムへと配属されるのは来年の10月ですが、推薦入学とフロンティア・スタディ・プロジェクトの学生は、生物プログラムへの配属を前提としてプログラム独自の取り組みを始めています。現在は生物学プログラムの教員や上級生との親睦を深めることを中心に、生物学プログラム各教員の研究室訪問などを行っています。今年度の推薦入学とフロンティア・スタディ・プロジェクトの学生は合わせて9名でしたが、これに3年次編入生4名と2年次転学科生1名を加えた14名を、新しいメンバーとして迎えました。昨年度までとは規模は少し小さくなりましたが、4月の新入生懇談会を実施しました。7月には例年通り夏の懇親会を行う予定です。

改組に加えて今年度からはクォーター制もはじまり、生物プログラムのカリキュラムも大きく変わりました。入学後2年次前半まではプログラム配属前ですので、主に理学部共通科目を履修することになります。2年次までに開講され生物学科で必修となっていた基礎講義科目は、「主専攻コア科目」に分類され生物学プログラム以外に配属される学生の履修も可能となりました。また、基礎生物科学実習Ⅰ・Ⅱは廃止となり、「共通ベーシック科目」に分類される生物学基礎実習をかわりに履修することとなります。これとプログラム配属後の専門実習を合わせて、これまで以上の内容の教育ができるように検討しています。

昨年度は、同窓会事業として「新潟県内高校教員との交流会」を9月に行いました。交流会ではまず、昨年度学科長の長東先生からの理学部改組と改組後の理学部生物学プログラムの教育についての説明が行われました。これに続いて、高校生物新課程の内容に関する研修会が行われました。これは、新課程になってから教える内容が大きく変わったところを中心に、その分野を専門とする教員が解説するというものです。昨年は、内海先生が遺伝子発現を中心に分子生物分野を解説しました。この交流会は本年度も開催する予定です。このような会などを通じて改組後の教育についての広報を進めるとともに、改組後の教育の充実を図りたいと考えています。生物学プログラムへと名前は変わりましたが、今後ともご支援を賜りたくお願い申し上げます。

地質科学 プログラム長 M.Satish-Kumar

平成29年度理学部1学科制改組に伴い、昨年度より教育研究体制について多くの議論を行い、新カリキュラムの準備態勢を整えてきました。新カリキュラムでは、これまで地学を学んでいない学生にその面白さと大切さを教えながら、地質科学へ興味をもたせる授業・実習が多く導入されています。

このような転換期を迎える環境の中、今年3月に4年生29名が卒業し、うち11名が大学院に進学しました。就職率は100%、多くの学生が地質関連企業へ就職しています。博士後期課程においては2名が課程を修了し、両名とも研究職に就きました。地質科学分野の発展に向け、今後の貢献が期待されます。

地学普及を目的とする活動も、大学院生と学部学生が中心となり、活発に行われております。7月には「地質の日サイエンスフェスティバル in 五十嵐キャンパス」が、10月には新潟大学WEEKの「地質まつり」が行われ、地質の面白さを存分に伝えるよい機会となりました。また、11月の理学部コロキウムでは、植田勇人先生が「～砂粒の年齢を測る～レーザーICPMSを用いた鉱物粒子のウラン-鉛法年代測定と地質学への適用」というタイトルで研究紹介を行いました。

最近では、大学院の博士後期課程で留学生（中国・韓国・台湾・インドなど）の受け入れが増加し、より活発な研究交流が行われています。大学院生の研究活動としては、5月に行われた日本地球惑星科学連合大会にて、地質科学科から進学した院生が学生優秀発表賞を受賞しました。

今年度の1学科制を皮切りに、ますます教室を取り巻く環境の変化が大きくなっていくことが予想されますが、1年生向けの野外実習や実験を通して、これまでと変わらずフィールドジオロジーの大切さを伝えていきたいと思っております。

今後とも地質科学プログラムへの暖かい御支援を皆様から賜りたくお願い申し上げます。

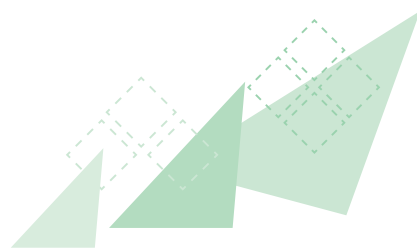
フィールド科学 フィールド科学人材育成プログラムの概要 プログラム長 本田 明治

フィールド科学人材育成プログラムは、平成29年度に理学部改組に伴って新しく立ち上がったプログラムです。本プログラムの最大の特徴は、理学部と農学部の教員が協働で授業や実習を担当する全く新しい学部横断型プログラムであることです。両学部の強みを活かして「生態学」「環境動態」「災害」の3つのキーワードのもとに、生態・森林再生・保全学、海洋・気象学、地形・地質学、および災害科学にまたがる多彩なフィールド科学分野の講義および実習科目が用意されています。これらの豊富な科目群の学修やフィールドでの実習体験を通して、野外での問題解決に必要な科学的知識と実践的な技術を身につけた人材の育成を目指します。

当プログラムに関わる教員は、理学部自然環境科学科と農学部生産環境科学科を主に母体としていますが、佐渡3施設(理学部附属臨海実験所、農学部附属フィールドセンター佐渡ステーション、朱鷺・自然再生学研究センター)、災害・復興科学研究所の教員も多く関わっています。総勢約30名の教員により、理学及び農学の基礎的な科目、自然環境やフィールドに関する基礎的な知識、生態や生物多様性保全、防災・災害復興、自然再生、環境動態などの応用的科目、佐渡3施設を主に活用した森林、里地・里山、海洋に関わる豊富なフィールド実習科目など多彩な科目群が提供されます。

当プログラムの受け入れ人数は理学部より10人、農学部より10人の計20人を予定しており、他プログラムと比較すると小規模となっています。4年生になると卒業研究のため研究室に配属されることとなりますが、約20名の学生は理学部所属、農学部所属に依らず、当プログラムに関わる約30の研究室(教員)の中から希望する研究室を選ぶことができることも、当プログラムの魅力であるとも言えます。

29年度の改組より理学部理学科の1学科体制となり、各プログラムへの配属は2年次後半からとなるため、当プログラムに最初の学生が所属するのは平成30年10月となりますが、1、2年生向けにもフィールド科学に関わる科目も用意されており、学生を受け入れる体制も既に出来上がっております。このような新しいプログラムの立ち上げは学内のみならず学外からも注目されており、魅力あるプログラムをしっかりと築き上げていきたいと考えておりますので、同窓会の皆様も是非これからのフィールド科学人材育成プログラムに期待して頂きたいと思っております。



理学部 後援会より

後援会会長

渡 邊 俊 弘



新潟大学理学部同窓会会員の皆様には、ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。また平素は後援会の活動にご協力を賜り厚く感謝申し上げます。

理学部の平成28年度卒業生の進路状況は、約半数が大学院へ進学、約4分の1が民間企業への就職、次いで公務員、教員となっておりますが、就職にあたり学生達が高い期待と評価を頂けるのは、ひとえに先輩である皆様方の社会でのご活躍の賜物であると大変感謝いたしております。

さて、理学部は今年度改組により「1学部6学科」から「1学部1学科7プログラム」に変更され、従来の学科ごとの縦割型教育から分野横断型教育となりました。また授業においても前期後期の2学期制からターム制に変更になるなど大きく変わりました。学生達に多少の戸惑いもあるようですが、先生方のご指導のもと、保護者としてしっかりフォローしていきたいと思っております。

また、組織が大きく変わる一方で、昨年引き続き国際交流事業、キャリア・フォーラム等素晴らしい企画も多く予定されており、先日開催されたノーベル物理学賞を受賞された梶田教授をお招きしてのシンポジウムも大盛況でした。先生方のご尽力に感謝するとともに、後援会としても引き続き陰ながら協力していく所存であります。

同窓会会員の皆様には、学生が自信を持ち社会に貢献できるようご指導そして応援して頂けたらと思っております。今後とも皆様の支援をよろしく申し上げます。

全学同窓会からのお知らせ

●新潟大学・全学同窓会交流会

平成29年10月29日(日)15時よりANAクラウンプラザホテル新潟にて新潟大学・全学同窓会交流会が開催されます。今回は瀬田クリニック東京院長の後藤重則先生(医学部卒業生)より「がん治療を大きく変貌させる免疫療法の現状と今後」と題して、大きく変貌するがん治療の現状をご講演いただきます。ご都合のつく方は是非ご参加ください。詳細は全学同窓会HP、広報紙「雪華」16号をご覧ください。

●雪華支援事業について

「新潟大学の発展と社会への貢献に資する」という全学同窓会の運営理念に合致する事業を支援するため、2008年度から公募型の雪華支援事業(1件あたり50万円以下の助成)を実施しています。2017年度も8月17日を締切とする公募を行い、総額350万円を助成いたします。これまでの採択事業の詳細は全学同窓会HPに公開されています。

●賛助会費納入のお願い

前述の「雪華支援事業」の予算は同窓生からの賛助会費を原資としています。応募件数は年々増加しており、採択された事業(2016年度は26件)は、母校のブランド価値の向上、好感度アップにも貢献しています。事業拡大のためにも賛助会費の納入をお願い申し上げます。

首都圏同窓会 と私

理学部首都圏同窓会の近況

理学部同窓会首都圏同窓会幹事 昭36年化学科卒 佐藤 茂 司

今年6月24日(土)東京の湯島に近い新潟県人会館にて第32回理学部首都圏同窓会が開催されました。新しい卒業生の参加を期待して案内を送付しましたが、約40名の同窓生が参集され例年どおりの同窓会となりました。

新潟大学より前野理学部長に出席をいただき大学の現状及び理学部の新教育カリキュラムに関してご説明を頂きました。次にサイエンスセミナーの発表は2件で、大学より物理学専攻で数学科の家亀洋先生に「物理学の新展開—経済物理学」というテーマで物理学手法や分析方法を用いて経済現象を分析し法則を見出し経済学に役立てる経済物理学として発展している内容です。

次に風岡修氏(地質S58年卒)に依る「黒湯のルーツを探る」のテーマで古関東深海盆の形成過程から地下水は天然ガス(かん水)になりかん水は天然ガスとして採取され利用されたり、ちゃ水地下水は「黒湯温泉」の源になる内容です。各々の講演は我々に

新知識を与えていただき有意義でした。

総会は会計報告で終了しあとは立食形式で懇親会に入り情報交換、お互いの近況状況等語り合い和やかに再会を誓って無事に中締めで終わりました。最後にこの同窓会を発展させるには出席者を増やす必要があります。首都圏を中心に約千名の卒業生にご案内を発送しておりますが返信は約11%でした。最近卒業した同窓生はもちろん会社等を退職された方々に是非出席をお願いしたいです。5月に新潟で開催されました化学科卒の工藤教授の退官式典に出席して首都圏に在住の卒業生に同窓会への出席を呼びかけてきました。

今年は物理学科同窓会の当番幹事で担当し来年は化学科同窓生が担当します。我々同窓会幹事担当として皆様に関心のあるセミナーのテーマを選定して行きたいと思っております。今後とも皆様のご支援を宜しく申し上げます。

支部だより

数学科

支部長 武石 文雄

平成29年度は、4月22日に役員会を開催し、29年度事業計画、平成28年度決算、29年度予算を決めました。また、6月10日には、支部総会に代わる理事会を開催し、29年度事業、予算及び支部内役員についての承認をいただくとともに、10月に行われる今年度の在校生と卒業生との懇談会についても審議していただきました。

なお、この会議で、平成22年度から支部長を務めてこられました樋浦卓嘉さん（第12回）からの強い支部長辞退の願い出があり、支部長に武石（第20回）、そして副支部長に轡田勝祐さん（第28回）が就任することになりました。皆様のご協力を宜しくお願いいたします。また、樋浦さんには長い間支部活動にご尽力いただき大変ありがとうございました。この場を借りて御礼申し上げます。

4月上旬、散歩道（農道）でオオイヌノフグリがきれいに咲いています。しかし、いくら探しても、環境の変化か、外からの種に生活の場を追われたためか、在来のイヌノフグリは全く見当たりません。理学部同窓会になって27年ですが、学科で閉じていた時代に学んだ人の中には、学部や全学同窓会になじめないという声も聞きます。また、若い世代の組織離れや大学の改編による今後予想される学科の考え方の変化など、世代による多様な考えを包含できる、そんな支部活動の妙案はないのでしょうか。

物理学科

支部長 麩沢 祐一

昨年から支部長ということですが、皆様にご迷惑をおかけし、何とかやっけてまいりました。どうもありがとうございます。

その中で、物理支部は、例年通りの活動をしてまいりました。支部の役員会開催や総会への出席です。しかし、できるだけ理学部物理学科の学生を支援する活動ができないかと考えてまいりました。

今年は、6月10日のケルビン祭に出席してまいりました。毎年、物理支部から表彰される学生3人に副賞として、それぞれ1万円の図書カードを贈呈し、他にチームチーティングに対して2万円を援助しています。それを大原学科長に手渡し、開会式にはご挨拶させていただきました。

これは、野本同窓会長さんからお金についてはどこがどのような趣旨で出したものか明らかにして欲しいとお話があったこと、これがきっかけになって、学生の皆様と触れ合う機会が増えることにより、交流も盛んになるのではと思って参加した次第であります。

学生の皆様は、40年も前の卒業生が突然来て、話をしてもどうということか、分からないことと思います。私も同じですが、これからどのような支援ができるの

か、検討してまいりたいと思います。

これからもどうかよろしく願いいたします。

化学科

支部長 畠野 弘通

支部役員の方々からご協力をいただき、理学部同窓会代議員会や総会、全学同窓会交流会などに参加してまいりました。代議員会では、理学部長から新しい「理学科」、「主専攻プログラム」等の説明がありました。詳しくは、学部のホームページをご覧ください。

核化学がご専門で同窓の工藤久昭教授の退官記念謝恩会が、5月にありました。先生が113番新元素Nhの発見に多大な貢献されたことは、ご案内のとおりであります。約100名の方々のご参加をいただき、往時を懐かしむことができました。実行委員長の後藤真一准教授に感謝申し上げます。

大学は今、変革、競争を迫られています。会員の皆様方には、学部行事にご参加いただくなど、今後とも、ご支援、ご協力をお願いいたします。

生物学科

支部長 荒木 勉

同窓生の皆さん、いかがお過ごしでしょうか。

例年、あまり活動数・事業数が少なく恐縮しております。

ところで、新大理学部では、今年度から一学部一学科へと大幅に改組がなされました。このことについては、大学のアナウンスや一般紙などの報道でご存じの方も多いかと思えます。しかし昨年、大学の努力にもかかわらず、高校現場にしっかりと浸透しているとはいえず、生物学科の先生方や私も同窓会にまで多くの質問が寄せられました。そこで急遽、昨年9月3日（土）、同窓会生物学科支部が主催して、「高校の生物教員と理学部生物学科教員との交流会」を名称として、学部改組について特に生物学科の変更点の説明と、現教育課程が大幅に分子生物学的な内容にシフトしていることから教科書の内容に関するセミナー（遺伝子のはたらき）を開催しました。その結果、高校教員24名、生物学科教員8名、同窓会事務局4名の併せて36名の参加がありました。会としては成功とは思いますが、多くの質問の内容から高校現場への説明がまだまだ不十分であると感じました。

今年4月、学部改組の初年度が始まって、どのような変化があるかなど改組の内容についての多くの質問が、生物学科の先生方や同窓会へ再び寄せられました。昨年度は、進学指導から見て9月では遅すぎるという意見から、8月5日（土）に、昨年と同様の内容で開催することといたしました。セミナーは「植物の環境応答」の分野で、主に植物ホルモンについてです。ご関心のある方は是非のぞいてみてください。アートホ

テル新潟駅前、4階湯沢の間で、午後2時から4時半までです。懇親会も行います。

その他日常の活動として、同窓会と同窓生、院生、学生、生物学科の先生方などとの親睦やお互いの発展を願える効果的な事業を募っております。妙案がありましたら、事務局までお知らせください。

地質科学科

支部長 田澤 純一

「卒業生と在校生の集い」が昨年10月23日に開かれ、加々島慎一(43回卒、山形大学理学部)、金山健太郎(56回卒、大日本コンサルタント)、山田翔輝(58回卒、長野県立上田高等学校)の3氏が職場紹介をしました。それぞれ、どのようにして現在の職場に就職できたか、そして今どのように働き、生きがいを感じているかといったおもしろいお話でした。また、16名の卒業生から職場紹介(ポスター発表)がありました。前日は在校生との飲み会“秘酔”が理学部玄関前で開かれました。

「植村 武先生の米寿を祝う会」が昨年11月5日に新潟東映ホテルを会場として開かれました。植村先生御夫妻と先生の卒論指導を受けた卒業生など31名が集まりました。先生奥様共にお元気で、和やかな会でした。

「新年会」は、今年2月4日に関屋田町の「力鮎」で開かれました(出席者16名)。初めに田村幹事長の支部活動報告、田澤支部長の挨拶があり、次いで一同お酒を飲みながら、自己紹介と近況報告をしました。おわりに熊谷 忍氏(4回卒)が中締めをしました。今回は、長谷川、松岡、高澤、サティシユの4名の先生が出席されました。

「恩師島津先生と一緒に佐渡を楽しむ会(第5回五研会)」が今年5月24、25日に佐渡で開かれました(出席者

15名)。島津先生は91歳におなりですが、お元気で、一緒に赤石の展示、佐渡金山、尖閣湾などを見学しました。

平成29年度の「土木地質学」は下村博之氏(33回卒、(株)パスコ)が担当します。

今回の「会報」の編集担当は地質科学科支部でしたが、編集委員長の馬場幹雄さん(35回卒、(株)キタック)ご苦労さまでした。

自然環境科学科

支部長 尾原 祥弘

今年度も、例年と同じように、総会と懇親会の開催、後輩支援事業の2つを柱に活動しています。また現在、総会とともにスポーツ交流会や就職支援講演会等の開催を役員・幹事一同企画しています。この会報と一緒に会員の皆様のもとへお知らせできるかと思っておりますので、同封されてくるお知らせをご覧いただき、ぜひご参加ください。

昨年の就職支援講演会は、3名の卒業生を講師として招き、公務員の仕事内容等について話していただきました。学部2・3年生を中心に30名程度の参加者があり、好評でした。今年度も、より多くの学生が来てくれるよう準備を進めて参ります。

今年度で総会は17回目を迎えます。東京オリンピックが開催される年には総会も20回目を迎えます。第20回の総会は、よりたくさん同窓生が集まる会にしたいと考えています。つきましては、第20回記念総会・懇親会の実行委員会を立ち上げたいと思います。盛大なイベントを企画運営して下さる方を募集いたしますので、奮って立候補をお願い致します。

最後になりますが、今後も同窓会の活動にご理解とご協力をよろしくお願い致します。

若手卒業生から(実社会に出て)

数学科

平成29年卒 阿部聡一郎

現在私は新潟大学の事務職員として勤務しております。新潟大学に4年間お世話になり、卒業を迎えたかと思ったら今度は職員としてお世話になり始めました。自然科学系総務課に配属され、主に、先生方の研究費を扱う業務に携わっています。今まで講義をしていただいたいの先生方とこのような形で関わっていくことになろうとは、思ってもみませんでしたが、微力ながら恩返しをしていけたらと思います。

私の同級生の中には大学院に進学した者もいますの



で、キャンパス内でばったり遭遇するということもあります。ついこの間まで同じ立場だった仲間たちと、私は職員として、彼らは学生として同じ組織に属しているのかと思うととても不思議な感覚です。立場は変わりましたが、そんな仲間たちと共に、新潟大学を盛り上げていきたいと思っています。

物理学科

平成27年卒 神 貴志

平成29年3月に新潟大学大学院の修士課程を修了し、4月からIT企業で勤務しています。現在は研修中であり、業務に必



要な技術を磨いています。普段できない経験を積むことができ、また、とても頼りになる先輩方が周りになるので学ぶことが沢山あり、日々新鮮です。

大学院での生活は研究に明け暮れていました。ゼミでの発表や修士論文作成の際に、課題を解決するために、頭を悩ましたり、関連する文献を読んだり、質問したりして、必死だったことを思い出すと、このころに身に着けた姿勢が仕事に活かされていると実感しています。

社会人としても技術者としてもまだまだ未熟ですが、早く一人前になれるよう、日々精進してまいります。

化学科



平成29年卒 遠藤 夏実

私は化学科を卒業して、自動車部品メーカーに勤めています。今はまだ研修期間で、本配属になる部署とは別のところでデータ解析、アームロボットの操作などを学んでいます。ロボット操作では、ロボットやプログラミングについて何も知らないし、スイッチ一つ押すのも怖かったのですが、今は自分のプログラム通りにスムーズに動くのがとても楽しいです。知らないからできない、ではなく、失敗してもいいと一年目の特権を使って、やります！と自分から動くことが重要なのだと実感しています。毎日、オフィスで海外支社から帰ってきた人や英語で現地法人とテレビ通話している様子を見かけます。日本国外と連携することが自然に行われている中に私も早く、語学力と技術・知識を身に付けて進んでいきたいです。

生物学科

大学院を卒業して2年経ち、社会人3年目を迎えております。現在、私は株式会社タケショーで勤務しており、食品開発の配合設計、シーズニングの開発を行う研究開発部に所属しております。私は生物専攻で、今の職では生物の専門知識などを活かす場面はほぼありませんが、学生生活で身につけた研究への取り組み方や管理技術は今とても活かされていると感じています。研究室での実験報告は仕事の報告書作成に、研究スケジュール管理は仕事の進

平成25年卒 杉山 智之



め方に大いに活かされています。

まだまだ社会人として未熟者ですが、今ある自分は大学時代にお世話になった先生方、研究室の皆さんのおかげであると思います。自立した社会人となれるよう、職務に励みたいと思います。

地質科学科

平成24年卒 中村 佳博



私は新潟大学大学院を卒業後、産業総合研究所調査総合センターという国立の研究所にて、全国の地質図幅を作成する業務についています。この業務では現地での地質調査を行い、岩石を採取し分析して最終的に地質図を作成するという大学院時代の研究に関連した業務を行っています。ただし担当する図幅は約20 km×20 km以上の規模があり、学生時代とは比較にならない規模と年月をかけて調査しなければなりません。調査にでるとこのスケールの大きさに驚きを隠せませんでした。自分ができることは限られていました。それは新潟大学で学部生時代から教えていただいた走向傾斜を計測し、岩石を判別するという地質調査の基本です。学部・大学院時代を通して様々な巡検で培った知識を総動員してこれからも研究を行っていききたいです。

自然環境科学科

平成29年卒 青木 香奈



新潟大学を卒業し、少数か月が経ち、めまぐるしく変わった環境にやっとな慣れてきたところです。現在私は群馬県職員として働いており、農薬の適正使用、危害防止運動などの業務を主に担当しています。学生のときは農薬に関する勉強は全くしておらず、分からないことだらけですが、農薬の成分は化学、農薬を使用する害虫は生物に通じる部分があり、自然環境科学科で幅広く学んだことが活かされ、うれしく思います。また、知識以外でも学生時代身につけた分からないことを自分の力で突き止めていくという姿勢は必ず今後業務を行う上で役に立つと考えています。

まだまだ未熟者ではありますが大学で学んだことを生かし、業務に励んでいきたいです。

**集中講義の
講師を務めて**

「土木地質学」を講義しての雑感

小野田 敏

(理学部地質鉱物学科：昭和58年卒)

昨年度と一昨年度に「土木地質学」を集中講義する機会を頂いた。私が学生の頃も社会で活躍されている先輩方の講義があり、日頃の授業では聞けない体験談や社会で地質学がどのように活用されているのかをお聞きし、胸踊ることがあった。私自身も社会人となり、様々な分野で地質学が応用されていることを実感しており、学生諸君には夢のあるお話をしたいと思った。

実際には、私の勤務先が航空測量会社ということもあり、地形・地質をキーワードとして、土木地質学の現状と地形・地質調査の果たす役割と手法について講義した。網羅的な講義となってしまったが、その中で、中越地震の際に私自身が航空機から被災地上空を飛び、その時技術者として、どう対応したかの体験等は熱く語らしてもらった。

東日本大震災、広島豪雨災害、熊本地震等を例に出すまでもなく、脆弱な国土に暮らす我々は斜面・地盤災害等の地形、地質的なリスクは避けられない。また、社会インフラの基礎(まさに地盤)を支えているのは地質に精通した技術者とも言え、その責任は重い。一方、杭の根入れ深さ等の偽装事件等もあり、技術者に対する信用が失墜する事件も後をたたない。社会に出てエンジニアや教師、あるいは研究者になるにしても、自分の技術や研究が社会とどのように関わっているのか、その中で自分の役割は何か等、技術者倫理の話もさせていただいた。

新潟大学理学部も大きく変わると聞いている。たしかに、細分化された専門科目の履修だけでは、現在の社会の要請に答えられなくなっていると思う。また、学生時代は専門分野だけでなく、ひろい意味での教養を学ぶ(人間力を高める)ことが重要である。弊社でも地形・地質を高校時代に習ってない人が多く存在しており、地形図が読めない(尾根と谷がわからない)新人もいる。各分野のエキスパートは、このような専門外の人ともコミュニケーションを取り、分かりやすく専門技術を説明することが求められている。このようなことを理学部の学生が意識することは重要と思う。

私の講義はつたない授業であったと思うが、講義する機会を頂いた新潟大学理学部と聴講していただいた学生に感謝します。ありがとうございました。

追記：私自身も学生時代を思い出し、昔からある大学近くのお店で美味しいお酒をいただきました。これは今も昔も変わらないです。変わったのは、今は偉そうに講義している自分ですが、学生の頃を思い出すと、今の学生さんの真面目さと勤勉さには遠く及ばないと感じています。

表3 理学部同窓会整備・振興寄付金 拠出者御芳名(敬称略) 平成29年6月現在

● 数学科

菊部 富雄	寺尾 芳樹	那須野 恭子	中井 良
岩原 侑	金子 正義	樋熊由紀夫	瀧澤 博信
渡辺 雅之	高橋 哲夫	竹内 正文	小林 邦弥
阿部千鶴子	五十嵐隆夫	鈴木紀美子	永井 邦昌
伊藤 道一	永井 健樹	青木 孝史	伊藤 晶子
神戸 平次	本家 武子	細野 晃	遠藤真智子
堀 行	井村 悦子	石井 一也	佐々木潔朗
岩田 隆子	岡崎美津子	田中 環	柄澤 涼司
吉川 益男	山口 真理	鈴木 哲	佐々木善雅
菊地重治郎	伊東 孝芳	諸我 伸子	
樋浦 卓嘉	日比登史男	大塚 高央	
宮坂 幸雄	吉成 毅	白石 勝夫	

● 物理学科

中村 久子	小山健一郎	渡辺 孝一	鈴木 俊男	西脇みちる
金井 芳夫	小林 一男	垣内 信夫	矢代 博行	坂本 泰史
駒野 庄平	野本 憲雄	白川 保憲	石川富二男	酒井 和幸
小林 修	高崎 功一	原 外満	前田 義憲	常石 真映
森山 孝史	本間 正宣	坂井 貞夫	東海 良樹	本田 瑞枝
貝沼 次郎	篠原 真	高木 広道	高橋 透	須田 孝司
高津 雄造	橋本 俊彦	廣田 星一	工藤 幸人	二戸 祥之
赤塚 節	寺前 直子	上林 俊一	山岸 靖宏	十文字 伸哉
辻本 忠	遠山 正雄	佐藤 三男	加藤 和利	菅野 義博
百瀬 正一	海老名郁夫	高見沢一男	須藤 智裕	清野 義敬
土田 登	田中 清隆	長谷川正志	武田 政義	佐藤 貴明
畑野 清司	渡辺 俊英	渋谷 孝雄	風間 陸勇	上島 芳倫
畑 正	小海 哲	澁沢 祐一	黒沢 昌基	

● 化学科

鈴木 俊雄	花見 英男	浅井 恒雄	三上 正人
伊藤 義夫	石塚 紀夫	斎藤 清	樋口 靖
片桐 啓三	赤沢 宏	山崎 俊雄	斎藤 博之
藤崎千代子	半田 進	星野 洋子	重富 潤一
渡辺 初男	逢坂 勝也	福島 幹雄	沼崎 恭子
寺尾 和夫	岡本 紀子	坂本 憲司	金子 洋介
梅澤 貞雄	丸山 宏	坂本 憲司	赤間 智也
田澤 繁	谷川 義夫	岩井 優	星野 清司
三屋 彰	青木 英二	東田 良和	近藤健一郎
小川 勝	宮下 育子	谷口 和史	山田 幹
長尾 典	村松 信輔	羽深 等	高橋 聖美
高橋 英司	伊藤 光子	村山 茂子	柳沢和子
田才 邦彦	小林 和雄	村田 淳	根岸 裕太
松澤 澄江	渡辺 昭雄	青柳 義昭	猪股 教大
佐藤 茂司	高坂直美智	三ツ寄敏雄	宮川 雅人
井古田仁司	関 和彦	井神いづみ	金作ひかり
関川富士夫	伊藤 光仁	橋本 雅文	氏家 葵

● 生物学科

南雲 照三	小林 道頼	正田 豊	森山 康子	樋口 恭子
曾我 浩	北田 泰之	長谷川英男	笹川 通博	榎本喜美子
平林 光雄	長谷川 博	荒木 勉	菅原 英記	門脇 康之
帆苅 信夫	清水 榮一	小野寺 隆	久保 隆之	松本 真実
小泉 功	天谷 信忠	林 正栄	高山 直樹	月江 玉緒
伊藤 節弥	細野 正道	大木 敏行	藤原 信一	柴野 卓志
細谷 和江	星野嘉恵子	佐藤 克美	猪熊 正則	高木 有希
細谷 安彦	小川 忠雄	石坂 均	高橋直一郎	
内田 善昭	加藤 俊成	坂井 文信	頓所 裕史	

● 地質科学科

倉又 孝夫	吉田 滋	近藤 卷廣	滝本 俊明	田利信二朗
奥村 義郎	松波 武雄	川島 信行	柄原真与子	中澤 健太
大西 淳	沼田 誠	伊豫田成子	柴崎 俊明	八木 郁恵
熊谷 忍	二瓶 文雄	深澤 光	田中 力	小高 光
畑中 博文	岡田 正明	天津 道孝	杉山 和稔	眞鍋 達郎
佐々木邦夫	藤原 芳秀	中川 充	佐藤 壽則	吉田 拓海
石橋 輝樹	佐藤 成昭	清水 功	新井 孝志	
近藤 和久	佐藤 憲司	野中 孝彦	渡部 直喜	
加藤 靖夫	熊谷 誠	稲葉 充	小島 玄生	
山野井 徹	高橋 正行	青野 道夫	榎本 武敏	

● 自然環境科学科

松橋 麻里 石山 豊 池田 裕一

表1

平成28年度 理学部同窓会決算

一般会計

	費目	予算額(A)	決算額(B)	比較(B-A)	説明
収入の部	終身会費・寄付金	5,000,000	4,736,500	-263,500	
	終身会費	4,000,000	3,820,000	-180,000	191名×20,000円
	寄付金等	1,000,000	916,500	-83,500	整備・振興寄付金 272名
	他会計繰入金		0	0	
	雑収入	78,000	72,861	-5,139	全学同窓会資料同梱発送費清算、等
	繰越金	1,295,893	1,295,893	0	
合計		6,373,893	6,105,254	-268,639	
支出の部	会議費	250,000	55,645	-194,355	諸会議交通費等
	広報費	754,000	765,315	11,315	
	「会報」発行費用		374,220		「会報17号」7500部
	「理学部は今」発行費用		385,560		同窓会分7000部
	その他		5,535		HP運営費
	理学部支援事業費	700,000	660,000	-40,000	グローバル人材育成推進事業補助、卒業祝賀会助成
	名簿編集費	20,000	0	-20,000	
	負担金等	455,000	452,800	-2,200	全学同窓会賦課金
	支部交付金	460,000	460,000	0	6支部及び首都圏支部
	支部事業補助費	400,000	271,000	-129,000	数学、自然環境科学、地質科学各学科支部
	事務諸経費	70,000	110,278	40,278	光熱水費、消耗品等
	事務局費	600,000	419,800	-180,200	事務局人件費
	会員宛郵送費	850,000	850,507	507	6513名分
	人件費	200,000	192,000	-8,000	後援会パート手当
	小計	4,759,000	4,237,345	-521,655	
	他会計繰出金	1,000,000	1,000,000	0	28年度積立金
繰越金	614,893	867,909	253,016		
合計		6,373,893	6,105,254	-268,639	

特別会計

特別会計	費目	収入	支出	残金	説明
	繰越金	13,000,000		13,000,000	
	H28年度積立金	1,000,000		1,000,000	
	計	14,000,000	0	14,000,000	

表2

平成29年度 理学部同窓会予算

一般会計

※前年度とは費目の配列が一部変更されています。内容は同じです。

	費目	前年度予算額(A)	今年度予算額(B)	比較(B-A)	説明
収入の部	終身会費・寄付金	5,000,000	5,000,000	0	
	終身会費	4,000,000	4,000,000		入学定員200名×20,000円
	寄付金等	1,000,000	1,000,000		同窓会整備・振興寄付金等
	雑収入	78,000	78,000	0	全学同窓会発送費清算等
	繰越金	1,295,893	867,909	-427,984	
	合計		6,373,893	5,945,909	-427,984
支出の部	会議費	250,000	150,000	-100,000	諸会議交通費、会場費他
	広報費	1,604,000	1,666,700	62,700	
	「会報」発行費用	401,000	401,000	0	
	「理学部は今」発行費用	350,000	380,000	30,000	
	会員宛郵送費	850,000	880,000	30,000	会報等郵送料・運賃等
	その他	3,000	5,700	2,700	HP運営費
	事業費	1,120,000	1,120,000	0	
	理学部支援事業費	700,000	700,000	0	卒業祝賀会費補助等
	支部事業補助費	400,000	400,000	0	
	名簿編集事業費	20,000	20,000	0	
	その他	0	0	0	
	負担金等	455,000	489,350	34,350	全学同窓会賦課金
	支部交付金	460,000	460,000	0	6支部及び首都圏支部
	事務諸経費	70,000	85,000	15,000	光熱水費、消耗品等
	事務局費	600,000	400,000	-200,000	事務局人件費
	人件費	200,000	200,000	0	後援会パート手当
予備費	614,893	374,859	-240,034	調整費	
小計	5,373,893	4,945,909	-427,984		
他会計繰出金	1,000,000	1,000,000	0	29年度積立金	
合計		6,373,893	5,945,909	-427,984	

特別会計

特別会計	費目	収入	支出	残金	説明
	H28年度までの繰越金	14,000,000	0	14,000,000	
	H29年度積立金	1,000,000	0	1,000,000	
	計	15,000,000	0	15,000,000	

事務局より

1、理学部同窓会「役員会・代議員会合同会議」開催

平成29年6月10日(土) 駅南キャンパス「ときめいと」において役員会・代議員会合同会議が開催された。

◎議事

- (1) 平成28年度事業報告・平成28年度決算報告(表1)
- (2) 平成28年度会計監査報告
 - ・事業報告及び決算報告・会計監査は報告のとおり承認された
- (3) 平成29年度事業計画・平成29年度予算(案)(表2)
 - ・提案のとおり承認された
- (4) 平成29年度役員について
 - ・提案のとおり承認された
- (5) その他
 - ・高大連携について協力者を推薦する

(4) 会費及び寄付金について

- ・後援会と連携し、平成28年度新入生より会費を徴収した
- ・財政力強化のため「同窓会整備・振興寄付金」のお願いにより、多くの正会員よりご寄付を頂いた(表3)

(5) その他

- (1) 会報について
 - ・会報17号は自然環境学科支部が編集担当した

2017年度(平成29年度)理学部同窓会役員名簿

役職	支部	氏名	役職	支部	氏名
会長	物理学科	野本 憲雄		化学科	本間 悟
副会長	数学科	武石 文雄	幹事		田辺 薫
	物理学科	麴沢 祐一			清水 榮一
	化学科	畠野 弘通			長谷川 博
	生物学科	荒木 勉			堀 昌明
	地質科学科	田澤 純一			田村 伸夫
	自然環境科学科	尾原 祥弘			豊島 剛志
	首都圏	矢口たみ江			渡部 直喜
幹事長	地質科学科	渡部 直喜		畑澤 尚宏	
幹事	数学科	樋浦 卓嘉	幹事	自然環境科学科	加藤 直之
		武石 文雄			永井 宏明
		田中 環			矢口たみ江
	物理学科	鈴木 重行		首都圏	安藤 勝利
		坂井 章			飛鳥 滋
		笹川 民雄			物理学科
化学科	三ッ寄敏雄		生物学科	藤間 真紀	

2、平成28年度事業報告

- (1) 広報活動
 - ・正会員に会報17号はじめ雪華などの広報紙を送付した
- (2) 理学部からの要請にもとづく各種支援
 - ・理学部卒業祝賀会の経費を補助
 - ・グローバル人材育成プログラムへの支援
- (3) 全学同窓会との連携について
 - ・賦課金・分担金を応分負担し、財政的に貢献した
 - ・理事会、運営委員会に参加し、運営に貢献した

転退職された先生(平成29年3月に)

退職された先生

化学科 工藤 久昭(教授)

昭和58年12月～平成29年3月
(1983年12月～2017年3月)
在職期間：34年
専門分野：核・放射化学

転出された先生

理学部付属臨海実験所 安房田 智司(助教)

平成23年4月～平成28年12月
(2011年4月～2016年12月)
在職期間：6年
専門分野：行動・進化生態学
転出先：大阪市立大学

物理学科 吉田 賢市(助教)

平成23年4月～平成29年3月
(2011年4月～2017年3月)
在職期間：6年
専門分野：原子核理論
転出先：京都大学

新潟大学理学部同窓会(事務局)

住所 〒950-2181
新潟市西区五十嵐2の町8050
新潟大学理学部内
TEL 025-262-6261 FAX 025-262-6261
E-mail ridoso@ad.sc.niigata-u.ac.jp
URL http://www.ridoso.jp/

❖編集後記❖

第18号の編集は地質科学科支部が担当させていただきました。前回の担当時(2011)もそうでしたが、全国で水害による被害が多数報告されています。新たな豪雨のメカニズム等は解明されつつありますが、予測の面ではまだまだ困難です。ただ、「理学」はその予測に少しずつ近づいているように思います。

原稿依頼および文章校正にご支援いただきました同窓会事務局、お忙しい中原稿を執筆していただいた皆様にご場をお借りしまして御礼申し上げます。どうもありがとうございました。